

審査講評

次の一手を目指した、基本に忠実な経営管理技術を評価
－先進性と堅実性を両立する経営構築に注目－

審査委員長 横溝 功

今年度は 14 道県の地方審査委員会より、酪農 9 事例、肉用牛繁殖 1 事例、肉用牛肥育 1 事例、養豚 3 事例、採卵鶏 1 事例の計 15 事例の推薦があった。魅力ある優秀な経営が多く、審査委員会では例年と変わらず審査に苦慮し、一部経営について評価が分かれ、審議が紛糾したことを報告する。

これら推薦事例について、第 1 回審査委員会で書類審査を行い、最優秀賞、優秀賞候補として 12 事例を選考した。そして、今年も 12 事例全部について、書類内容で把握できなかった項目、審査上で必要な項目について現地確認を行った。第 2 回および第 3 回の審査委員会を経て、先ほどの発表内容がこれまでの審査内容と相違ないことを確認し、最終的に最優秀賞 4 事例、優秀賞 8 事例を決定した。

審査基準は例年と大きく異なることはないが、今年は景気が低迷する中、畜産物価格の下落によって、売上高の下落をもたらせている。このような状況下で、より付加価値生産を目指した取り組み、ならびに基本に忠実な経営管理技術に基づくコスト低減によって、いかに経営を維持展開させているかに重点をおいた。なお、今年も昨年同様に畜種別の垣根を取り除き、生産性、収益性等の経営実績、それを支える経営管理技術、特色ある取り組みや活動等を、評価の中心に据えて、審査を行ったことを強調する。

それでは、発表順に最優秀賞 4 点を発表する。

まず、酪農経営で岐阜県加茂郡富加町の「ゆとりある乳肉複合経営を目指して！！」というテーマで発表された生駒一成さん、薫さん。

つぎに、酪農経営で岡山県岡山市の「今の私たち、酪農家冥利に尽きます！－市街化が進む中、土地循環型酪農で目指した地域のオアシス－」というテーマで発表された松崎隆さん、まり子さん。

つぎに、肉用牛肥育経営で青森県上北郡七戸町の「地域と共存した資源循環型大規模畜産への挑戦－『三方良し』（消費者・生産者・地域社会）の商人道精神に根ざして－」というテーマで発表された（有）金子ファーム。

つぎに、養豚経営で宮崎県西諸県郡高原町の「人工授精技術を取り入れたモデル的養豚経営～家族で育てる『我が子』豚～というテーマで発表された曾山文彦さん、照代さんである。

また、このほか 8 事例は優秀賞と決定した。

最優秀賞・農林水産大臣賞

岐阜県加茂郡富加町 生駒一成、薫さん（酪農経営）

生駒^{いこま}さんの経営は、経産牛飼養頭数 100 頭規模から 40 頭規模への縮小を、平成 4 年から 8 年の年月をかけて、成功裡に成し遂げている。地道な自給飼料生産の拡大、和牛受精卵移植の導入、牛群検定結果の活用によって、平成 20 年度には、家族労働時間約 4,000 時間で 1,100 万円を超える経常所得を上げている。経産牛 1 頭あたり所得は、30 万円を超えている。

1 点目に、平成 16 年に牛群検定に加入し、経産牛 1 頭あたりの産乳量は、平成 16 年の 7,107 kg から平成 17 年には 8,822 kg に向上させている。繁殖成績も、平成 16 年の平均分娩間隔 16.7 カ月から平成 17 年の 14.7 カ月に短縮させている。

2 点目に、自給飼料生産では、水田地域である条件を活かし、ブロックローテーションの転作田 1.2 ha を引き受け、ローズグラスを生産したり、農地の集積に努力して、トウモロコシ 1.5 ha、イタリアンライグラス 5.0 ha を生産している。その結果、粗飼料自給率 68.2%、飼料自給率 48.0%を実現している。

3 点目に、飛騨牛の和牛ドナー牛を保有し、和牛受精卵移植に取り組み、平成 20 年においては、和子牛 9 頭を販売し、445 万円の販売収入を得ている。これは、売上高の 11.6%を占めている。

4 点目に、薫さんが、人工授精師の資格を取得し、乳用牛と和牛の哺育・育成・繁殖管理を分担している。乳用牛の後継牛も自家育成で確保しており、牛群の整備に大きな役割を果たしている。

5 点目に、平成 11 年に、農業改良普及員の勧めもあり、町長の同席のもと、家族経営協定を町内で最も早く締結している。

6 点目に、たい肥は、稲作農家のたい肥舎へ運び、水田に還元している。また、稲わらを収穫し、飛騨地域の肥育農家に契約で販売している。当該肥育農家は、生駒さんの和子牛を市場から購入している農家であり、肥育成績・枝肉成績などが、フィードバックされている。耕畜連携、ならびに肉用牛における繁殖部門と肥育部門の地域内連携が確立されている。

7 点目に、町内の小学校 3 年生が、毎年、社会見学の一環で生駒さんの牧場を訪問している。平成 20 年には、酪農教育ファームの認定を受けている。

最優秀賞・農林水産大臣賞

岡山県岡山市 ^{おかやまけん} ^{おかもやし} ^{まつさき} ^{たかし} 松崎 隆、まり子さん（酪農経営）

松崎さんの経営は、干拓地に立地する。近年は、市街化が進み、当該牧場の周囲は、住宅が密集している。その中で、松崎さんは、近隣住民との関係を大切にするために、臭気の低減など常に気配りに怠りがない。また、早い時期から小中学校の生徒を体験学習などで受け入れるなど、地域の交流の場となっている。さらに、ジェラート工房の開店によって、地域の憩いの場としての機能を発揮している。現在、家族労働力 4 人、経産牛約 57 頭の飼養規模で、1,600 万円を超える経常所得を上げている。

1 点目に、自給飼料生産に熱心で、平成 13 年以降 38 戸の耕種農家から 11.2 ha を借り入れ、冬作にイタリアンライグラスを全面積、夏作にスーダン・飼料イネを

作付け、TDN 換算粗飼料自給率 70.3%を実現している。

2 点目に、エコフィードとして、ビール粕やリンゴ粕ペレットを活用し、経産牛 1 頭あたり購入飼料費 34 万円、乳飼比 40%と低く抑えている。

3 点目に、長男就農時の高泌乳追求による乳牛の疾病や事故の多発を教訓として、自給飼料多給による飼養形態に転換している。その結果、経産牛の耐用年数が延び、乳飼比の低下も相俟って、経産牛 1 頭あたりの経常所得が、平成 20 年には、28 万円を超えている。

4 点目に、たい肥化処理に関しては、副資材としてのオガクズの入手が容易である。また、消臭のため、コーヒー粕を近隣の乳業メーカーから調達している。良質たい肥を生産し、全体の 65%を近隣の耕種農家に販売している。

5 点目に、平成 19 年に、ジェラート工房を建設し、開店している。平成 20 年には、HP を開設し、インターネット販売に取り組み、平成 21 年には、県内地域の量販店にテナントを出店したり、岡山駅前前の専門店に商品を卸すなど、多角的な展開に取り組んでいる。近隣の夫人等 16 名を雇用し、地域の主要な雇用の場として機能している。

6 点目に、平成 4 年頃から始まった、近所の子どもの交流を契機に、年間 10 回程度の小中学校からの依頼による体験学習を受け入れている。また、牛乳の消費拡大をテーマとしたチャリティーファームバザーにも取り組み、売上金の一部は、福祉事業団へ寄付している。これは、消費者との重要な交流の場である。

7 点目に、岡山県にある（財）中国四国酪農大学校等から、数十名に上る研修生を受け入れており、酪農業界の人材育成にも貢献している。

最優秀賞・農林水産大臣賞

あおもりけんかみきたぐんしちのへまち 青森県上北郡七戸町 かねこ（有）金子ファーム（肉用牛肥育経営）

金子ファームは、取引先との長期的な契約を大切にし、お互いの信頼関係を構築して、経営を成長させている。家族労働力 4 人、常時雇用 20 人で、直営牧場 9 カ所を管理し、肉専用種 160 頭、乳用種 6,750 頭、交雑種 1,500 頭を飼養している。大規模ではあるが、緻密な飼養管理マニュアルを確立し、平成 20 年には、6,800 万円を超える経常所得を上げている。

1 点目に、肥育もと牛は、北海道の特定の哺育育成牧場から、契約や相対で購入している。契約している牧場は、モネンシンフリーの飼料で飼養している。また、毎月、相互の牧場を訪問して情報交流を図っている。

2 点目に、濃厚飼料は、特定の飼料会社を中心とした、指定配合を用いている。配合にあたっては、飼料の成分と旨味の間を科学的に解明するために、地元にある大学に試験研究を依頼している。配合飼料もモネンシンフリーである。また、支払いサイトを半月と短く設定し、有利に価格交渉を進めている。高い財務の流動性が、このことを可能にしているといえる。

3 点目に、粗飼料は、津軽平野に豊富に存在する稲わらを、コントラクター組織を通じて購入している。また、オーチャード・チモシーを 50 ha、デントコーンを

35 ha 生産するなど、肉用牛肥育部門では希有のケースであるが、飼料作にも取り組んでいる。飼料作は、従業員全員で対応し、適期作業を目指している。

4 点目に、厳選された肥育もと牛、飼料の投入によって、1.39 kg という高い DG、1.0% という低い事故率を実現している。

5 点目に、肥育牛の販売は、定時・定量の販売を目指し、大手食肉加工業者や食肉問屋と相対で取引を行っている。肥育牛の取引先からは、根強い需要がある。また、青森県内の生協へ、毎月 10 頭の乳用種肥育牛を、「健・育・牛」のブランドで販売している。

6 点目に、見町牧場で成功したビジネスモデルを、直営牧場、預託牧場に広げることで、成功裡に規模拡大を行っている。決して無理な規模拡大を行うのではなく、肥育牛の需要があるから、規模拡大を行っている。また、廃業する畜産農家の農場を、実質は、公的機関から請われて購入している。そして、牧場長には、地域内に存する熟年パワーを活用するなど、地域の重要な雇用の場を提供している。

7 点目に、青森県営農大学の学生を、研修生として積極的に受け入れている。現在、従業員のうち 3 名が、大学の卒業生であり、インターンシップとしての機能も果たしている。

8 点目に、ナタネを 7.3 ha 栽培し、景観の保全、たい肥の投入、オイルの販売、蜂蜜の製造と、多角的に活用している。また、牛肉加工品も、OEM で取り組んでいる。

9 点目に、当該牧場の 3 カ所にあるたい肥処理施設で生産されたたい肥は、半年間の熟成の後、自己の圃場へ投入する以外は、津軽のりんご農家やにんにく農家へ販売されている。

最優秀賞・農林水産大臣賞

みやぎけんにしもろかたぐんたかほらちよう 宮崎県西諸県郡高原町 そやまふみひこ 曾山文彦、てるよ 照代さん（養豚繁殖経営）

曾山さんの経営は、繁殖豚・子豚を単なる産業動物として扱うのではなく、生き物として大切に生命を育てている。その考え方が、経営行動に一貫してあらわれている。しかも、その経営行動が、高い経営成績にもつながっている。繁殖雌豚 115 頭を飼養し、家族労働力 3 人で、1,300 万円を超える経常所得を上げている。繁殖雌豚 1 頭あたり所得 10 万円を目標にしているが、平成 20 年には、11.7 万円を享受している。

1 点目に、平成 7 年に取引先のスタッフより、人工授精の技術を学び、試行錯誤の末、技術を習得している。通常、8 頭程度の種雄豚が必要なところ、4 頭程度に頭数を減らしている。

2 点目に、母豚カルテを用い、分娩時における繁殖雌豚の行動を丹念に記録している。例えば、発情がきても外観にあらわれない繁殖雌豚の性質を知ることによって、的確に種付けを実行することができる。

3 点目に、薬品会社の勉強会に積極的に参加し、自らのニーズに合ったビタミン・ミネラルのサプリメントを製造してもらっている。これによって、繁殖雌豚のへ

その緒を強化し、子宮の中で切れないようにして、死産を少なくしている。また、分娩時に、必要に応じてオキシドシンを投与して、後産や泌乳をスムーズにしている。さらには、未熟豚には高価なガンマーグロブリン入りの人工乳を哺乳させるなどのきめ細かい処置を行っている。

4点目に、以上の結果、年間分娩回数 2.46 回、分娩頭数 29.7 頭、離乳子豚頭数 27.2 頭を実現している。

5点目に、近隣の住民に配慮し、自己所有の山林を造成した広大な敷地に、近代的な子豚舎、浄化槽、たい肥舎を新築して、環境問題に関して後顧の憂いをなくしている。たい肥は、たい肥生産組合を結成し、2戸の耕種農家である組合員に無償で譲渡している。

6点目に、4年前に鹿児島県で開業した獣医師と、管理獣医師の契約を結び、安全安心に配慮した子豚生産を目指している。

7点目に、宮崎県畜産協会のコンサルタントを十分に活用し、子豚の原価把握を行っている。また、子豚の原価を精確に把握した上で、子豚の取引価格の交渉に臨んでいる。これによって、プライス・テーカーからの脱皮を図っている。なお、子豚の取引価格の交渉は、JA 宮崎経済連であり、1年間一定した価格を設定している。それ故、経営計画が極めて容易になっている。

優秀賞・農林水産省生産局長賞
北海道紋別郡湧別町 久保隆幸、美恵子さん（酪農経営）

久保さんの農地は、重粘土層という飼料作には劣悪な環境の下にあるが、ホタテの貝殻を暗渠として用いるなど、地道に排水性の向上に努め、10aあたりのデントコーン収量が6トンにも達している。その結果、飼料自給率 60%、乳飼比 31%と優れている。また、間伐材を牛舎に用いており、湿度調整がなされ、結露が防止されている。地域資源である麦稈を敷料として活用し、牛舎の衛生管理に努めている。バークリーナーは、月に2回点検し、その他の機械類も使用後の洗浄とグリスアップを行っている。このことが、機械の耐用年数を長くし、固定資産投資の抑制につながり、借入金額も低減させている。平成 20 年度期末の経産牛 1 頭あたり負債残高は、6 万円代と極めて少ない。経産牛飼養頭数は、64 頭と北海道では決して多くはないが、3人の家族労働力で、1,300 万円を超える経常所得を獲得している。新たに酪農経営への新規参入を考える後進にとって、大いに参考となるビジネスモデルといえる。

優秀賞・農林水産省生産局長賞
埼玉県児玉郡上里町 高田 茂、静子さん（酪農経営）

宅地化が進む中で、高田さんは、8.5 ha の農地集積に努力し、自給飼料生産に取り組み、夏作トウモロコシと、冬作イタリアンライグラスまたはエンバクの年 2 作を行っている。平成元年に県内の粗飼料利用を目的に作られた研究会の副会長を務め、平成 16 年からは会長を務めている。頭数規模拡大の制約の下、牛群検定を活

用し、経産牛1頭あたり産乳量が1万kgを超えている。また、体細胞数も6.1万個と極めて良好である。懸案であった家族の過重労働を回避するために、雇用を導入している。雇用に対しては、寮の整備、労災保険の加入等、福利厚生を充実させている。家族には、毎月、給与を現金で支給するなど、家族のインセンティブを高めている。また、埼玉県農業大学校の学生を研修生として受け入れている。

優秀賞・農林水産省生産局長賞
千葉県館山市 須藤裕紀、陽子さん（酪農経営）

須藤さんの経営は、フリーストール・パーラー方式、TMR自動給餌機の導入で、省力化がなされていると同時に、廃材・中古機械の利用等で施設・機械への投資が抑制されている。後継牛は全頭自家育成で、牛舎に隣接した放牧地で飼養されている。放牧地は、(社)日本草地畜産種子協会の県内唯一の展示牧場にもなっている。飼料作は、転作田の借入等により6haの耕地に、トウモロコシとソルゴーの混播栽培を行っている。簡易乳量計を用いた個体別乳量の把握、共済獣医師によるハードヘルスによって、経産牛1頭あたり産乳量9,375kg、分娩間隔13.0、受胎に要した種付回数2.1回と優れている。また、早くから消費者の酪農体験受け入れに取り組み、平成12年からは酪農教育ファーム研修を有料化するなど、サービス提供の高度化を図っている。酪農に関わる絵本の自費出版などの社会活動は、食と命の大切さを広く消費者に発信する重要なメッセージになっている。

優秀賞・農林水産省生産局長賞
新潟県阿賀野市 神田豊広さん、麻子さん（酪農経営）

平成15年から、神田さんは、阿賀ビジネスサークルに参加し、異業種交流を通じて、平成20年8月から自家ブランド牛乳を委託製造し、自らも販売している。生乳生産量のうち、自家ブランド牛乳の割合は、平成20年は20%であるが、平成21年には、乳類販売業の営業許可を取得して宅配等に取り組み、40%の見込みである。借入地により、耕地を積極的に集積し、11.3haにオーチャードとイタリアンライグラスの混播牧草を生産している。経産牛飼養頭数が43頭であるので、経産牛1頭あたり粗飼料作面積は26a、粗飼料自給率の33%を確保している。牛群検定、酪農経営データベースの活用により、牛群改良を図り、過去5年間の経産牛1頭あたり年間産乳量は、1万kg前後を維持している。

優秀賞・農林水産省生産局長賞
兵庫県朝来市和田山町 吉井 英之さん（酪農経営）

吉井さんは、平成12年、青森県での乳製品加工研修の後、アイスクリーム工房を建設し、平成15年3月から営業を開始している。現在、ジャージー種の経産牛11頭を飼養しているが、平成19年には年商5,000万円を超え、景気が低迷した平成20年にも年商4,000万円を超えている。これは、消費者に商品の良さが理解され、リピーターなどの固定客を確保できたことが大きい。そして、店舗の売上が4

割であるのに対して、6割がカタログ販売・ネット販売・出張販売と攻めの姿勢を貫いている。カタログ販売では、大手百貨店の中元・歳暮のカタログに掲載されている。ネット販売では、2万人以上の会員登録を確保している。出張販売では、平成16年に露店営業の許可を取得し、イベント等で販売を行っている。品質は良いがゼロから出発した乳製品を、マーケティング努力によってブランド化に成功したビジネスモデルといえる。

優秀賞・農林水産省生産局長賞
徳島県阿波市土成町 大松修二、法子さん（酪農経営）

大松さんの立地する土成町は、徳島市の通勤圏に位置し、混住化が進展して粗飼料生産のための農地の確保が難しい。それ故、購入飼料依存型にならざるを得ないが、飼料給与に関しては、大松さんは、牛体を十分に観察した上で、個体毎に500g単位で配合飼料の給与量を変動させ、自動給餌器を設定している。粗飼料に関しては、早朝、一定の時間内に計量したものを、手でほぐして給与するが、これを2回繰り返している。その結果、平成20年には、経産牛1頭あたり産乳量が9,300kgを超えている。また、飼料給与の無駄をなくすことにもなっている。このような飼養管理がマニュアル化され、記録されているので、ヘルパーが当該牧場へ訪問した際には、円滑な作業につながっている。

優秀賞・農林水産省生産局長賞
愛媛県大洲市 （株）多田ファーム（養豚経営）

高度経済成長から低経済成長へ移行した時期に、愛媛県南予の山間部へ、肥育豚団地として入植した11戸の養豚農家が、個別の一貫経営への移行を図る。しかし、投資の回収と資金繰りの問題に直面する中、平成12年に8戸の養豚農家が母体となり、会社組織による大規模一貫経営として経営転換を図った。適材適所による分業のメリットを活かし、繁殖雌豚1,000頭でありながら、その1頭あたり肥育豚出荷頭数が23.5頭であるなど、高い技術成績を享受している。その背景には、TKCソフトを用いた経営管理、全農WebPICSを用いた技術管理、SPF農場としての維持管理の生産努力がある。また、マーケティングでは、多田ファームの豚肉を扱う量販店において、多田ファーム独自の銘柄豚での精肉販売がなされており、肥育豚1頭あたり数百円の付加価値販売を実現している。

優秀賞・農林水産省生産局長賞
三重県鈴鹿市上田町 （有）鈴鹿ポトリ（採卵鶏経営）

鈴鹿ポトリは、定時・定量の良い商品の出荷を心がけ、取引先との信頼関係を構築している。その結果が、自己のGPセンター改修時に、自己の敷地内への鶏卵卸業者の誘致ということにつながっている。GPセンターの運営を当該卸業者に移管し、その時間を、鶏ふんのたい肥化処理に注いだ。その結果、鶏ふんのペレット化に取り組み、普通肥料として登録している。主として県内の有機栽培農家に販

売している。平成 20 年には、当該肥料の販売金額が 1,000 万円を超えている。鈴鹿ポートリーで生産された鶏卵は、午前 8 時 30 分から約 2 時間以内に、インラインで GP センターへ搬入される。そして、夕方には出荷され、翌朝には店舗に並び、鮮度と履歴が保証されている。安全安心な鶏卵生産の追求と、悪臭防止など、周辺住民への配慮に怠りがない。